日语专业系列教材

总主编■皮细庚

新编日语泛读教程

学生用书 第四册

本册主编◎孙成岗　副主编◎白晓光　刘芳亮

华东师范大学出版社

日语专业系列教材

总主编■皮细庚

新编日语泛读教程

学生用书 第四册

本册主编◎孙成岗
副主编◎白晓光　刘芳亮

华东师范大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

新编日语泛读教程. 第4册/孙成岗主编. —上海:华东师范大学出版社,2013.12
学生用书
ISBN 978-7-5675-1561-1

Ⅰ.①新… Ⅱ.①孙… Ⅲ.①日语—阅读教学—教材 Ⅳ.①H369.4

中国版本图书馆CIP数据核字(2013)第321179号

新编日语泛读教程 学生用书 第四册

主　　编　孙成岗
责任编辑　孔　凡
装帧设计　卢晓红

出版发行　华东师范大学出版社
社　　址　上海市中山北路3663号　邮编200062
网　　址　www.ecnupress.com.cn
电　　话　021-60821666　行政传真021-62572105
客服电话　021-62865537　门市(邮购)电话021-62869887
地　　址　上海市中山北路3663号华东师范大学校内先锋路口
网　　店　http://hdsdcbs.tmall.com

印 刷 者　苏州工业园区美柯乐制版印务有限公司
开　　本　787×1092　16开
印　　张　18.5
字　　数　473千字
版　　次　2014年1月第一版
印　　次　2014年1月第一次
印　　数　3100
书　　号　ISBN 978-7-5675-1561-1/H·661
定　　价　40.00元

出 版 人　朱杰人

(如发现本版图书有印订质量问题,请寄回本社客服中心调换或电话021-62865537联系)

编写说明

“新编日语泛读教程”系列教材为日语专业基础阶段泛读课程教材，含学生用书5册、配套教师用书2册，分别供大学本科一、二、三年级学生及同等水平学习者使用。

本书为学生用书第四册，供日语专业三年级下学期使用。其余各册为：入门篇（一年级下学期用）；第一册（二年级上学期用）；第二册（二年级下学期用）；第三册（三年级上学期用）。

◎ 本系列教材特色

阅读技巧和策略 至今为止，国内日语专业泛读教材中不乏优秀的、富有教益之作，唯有少见传授相关阅读理论的作品。在本系列教材中，我们大胆尝试设计编排了阅读技巧和策略的相关学习内容。教材提供全面系统的阅读训练，指导学生掌握猜词、细读、略读、寻读等方法，学会快速、准确地获取并处理信息。

主题选文 我们对选文精挑细选。选文富于知识性、趣味性、人文关怀的同时，注重题材视角的多元化和文体的多样性。题材涉及日本的社会、政治、经济、文化、文学、历史、宗教、体育、医药、环保、风土人情、科普知识等各个领域；同时，文体呈多样性，既有文学作品，又有记叙、说明、议论、新闻、广告等语言风格不同的各类文章。其独特设计充分体现了泛读课程自身的特点，更兼顾题材的系统性，旨在开阔学生的视野，增强日语语感，扩大词汇量，及其阅读能力和分析能力。

本系列教材的编写以教育部颁布的《高等学校日语专业日语教学大纲》对各个级别的阅读量、难度和速度的要求为依据，按难易度编排，学生用书每册15个主题单元。每单元围绕同一个主题设计了一篇主课文（テキスト A）、一篇副课文（テキスト B）和短文阅读训练。

主课文是为课堂教学设计的，副课文供学生在教师指导下巩固训练使用，三篇短文供学生训练阅读速度并对自己的理解能力进行自测。

下面对本系列教材的特点和使用作具体说明：

- テキスト A 阅读前

编者对主课文（テキスト A）的热身环节进行了重点编写。课文前的练习一中的两个问题旨在激活学生在相关话题上已经取得的知识，鼓励学生在这些话题上先发表初步的看法，待学生读完主课文后把自己的知识和看法与文章中所表达的观点相对比，使学生充分认识到视角的多元性。请学生围绕这两个问题展开讨论，并在学完课文后分析和对比作者的视角与自己的视角之间的异同。

- テキスト A

根据难易度和单元主题设计编排。课文长度从入门篇的500字左右逐渐增加到第四册的1800字左右。

- テキスト A 阅读后练习

在主课文之后，对文章的语言难点进行了注释，其中有一些是难以在一般的学习词典上查到的词语；练习题检验学生对主课文内容的把握能力，对这些问题的解答就等于掌握了这篇课文的

主要内容。

● テキスト B 阅读后练习

副课文后包括作者的简单信息以及对课文中语言难点和社会文化知识的注释。练习题或要求学生做简略回答，帮助学生理解文章的主要内容、作者的态度或文章的语气。或把课文主题与社会生活或学生的个人经历联系起来，鼓励学生学以致用，用学到的知识和语言讨论现实问题。

● 阅读技巧和策略训练

第一册到第四册的阅读技巧和策略专栏，根据日语教学大纲归纳出最常用的阅读技能和策略。第一册指导学生判断生词词义，熟悉句子结构，了解中心思想。第二册重点培养学生把握文本中心思想的能力。第三册着重阅读速度和逻辑推导方面的训练。第四册进行综合训练，提高学生对文本的批评鉴赏能力。

除了对阅读技能进行概括性讲解之外，每个专栏都给出例子供学生训练并掌握阅读技巧和方法。我们也在主副课文的练习题中设计了涉及技能和方法的题目，让学生把学到的技能及时运用于阅读实践。

阅读方法属于技能强化训练，即同一种阅读技巧要连续在几个单元内反复操练，以使学生能运用自如。我们在学生用书每 3 个单元设计了一个阅读技巧/策略专栏，单册共有 5 个专栏。

● 自测阅读训练

每课最后的短文供学生自行测试阅读速度和水平。每篇短文之后的问题都按国际日语能力测试以及日语专业四、八级考试中阅读理解部分的题型设计，既能够起到进一步扩大知识面的作用，又能让学生熟悉国际日语能力测试、日语专业四、八级的题型和难度。学生可自己进行计时阅读训练，在规定时间内完成。

◎ 阅读能力要求

本系列教材每部分的阅读理解练习都同时检验学生把握文章的能力，并根据文章的体裁和题材做出了相应的设计。例如，议论文后所提问的问题侧重于检验学生对文章的主旨、作者的意图、重要细节或论据的理解；叙述文后提问的问题则重点检验学生对主要情节和人物、作者的态度、文章的语气的把握能力。但二者也都包括对文章中语言难点和社会文化知识难点的理解。

本教材为日语学习者精心挑选或经典或具有时代感的日语文章百余篇，篇篇读来爱不释手。在此我们谨代表广大日语专业师生及日语学习者对原作者致以深深的谢意及崇高的敬意。

第四册在总主编皮细庚教授的指导下，由主编孙成岗，副主编白晓光、刘芳亮承担具体编写工作。

需要指出的是，教师在课堂上也可以灵活使用本教材，例如，在讲授任何一课时，教师可以根据学时的要求和学生的兴趣把テキスト B 作为课堂上主要讲解的对象，而把テキスト A 留给学生自学使用。

本教材希望对学生提高日语基本功、扩大知识面、培养逻辑思维能力、增强分析能力有所帮助。

虽然我们研读了各种教材及相关理论知识，但我们仍感到能力有限，错漏之处在所难免，欢迎各位专家、教师、广大使用者批评、指正。

编　者

2013 年 11 月

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

第一課

テキストA　読書について / 1
テキストB　「本」人それぞれの出会い / 5
テキストC
1　読書の態度 / 7
2　スロー・リーディングの実践 / 11
3　名作がひらく＜窓＞ / 14

第二課

テキストA　ひとすじの道 / 18
テキストB　12471 / 22
テキストC
1　豆腐とデニーズ / 25
2　見えない蝉 / 26
3　朝敵 / 29

第三課

テキストA　花は眠らない / 33
テキストB　風立ちぬ / 36
テキストC
1　日本美術と自然 / 39
2　余白の美 / 42
3　日本人にとっての庭 / 44

阅读策略专栏一

略读　总结概要 / 48

第四課

テキストA　日本人の外国観 / 52
テキストB　顔の見えなくなった大国 / 55
テキストC
1 「脱亜入洋」のすすめ / 58
2 国際感覚とは何か / 61
3 外人向きの日本文化 / 64

第五課

テキストA　ピアノ / 68
テキストB　AKB48と女子校 / 71
テキストC
1 能と無常 / 74
2 正念場 / 77
3 ピアノを教える / 82

第六課

テキストA　風土と包丁文化 / 85
テキストB　魂の食卓 / 90
テキストC
1 鮨 / 94
2 カトマンズにて / 98
3 緑色のゼリー / 101

阅读策略专栏二

查读　跳读 / 104

第七課

テキストA　現代人の知恵 / 106
テキストB　健康と科学・その他 / 109
テキストC
1　万能スパイ用品 / 113
2　「科学」という物語 / 116
3　車社会再考 / 120

第八課

テキストA　短歌の鑑賞 / 123
テキストB　俳句的生活 / 127
テキストC
1　美しい言葉とは / 131
2　日本の耳 / 134
3　サルスベリの立つところ / 137

第九課

テキストA　日本語の不自由さ / 141
テキストB　やっぱり / 145
テキストC
1　自分及び相手をなんと言うか / 150
2　直言すること / 153
3　日本語と日本文明 / 156

阅读策略专栏三

推论 / 160

第十課

テキストA　令嬢アユ / 162
テキストB　伊豆の踊子 / 165
テキストC
1　恋愛小説の陥穽 / 169
2　デューク / 172
3　ノルウェイの森 / 178

第十一課

テキストA　私はそう思わない / 185
テキストB　外の思考 / 189
テキストC
1　型の美学 / 193
2　異端礼讃 / 196
3　あ・紅葉入学 / 199

第十二課

テキストA　山茶花の宿 / 202
テキストB　一枚の葉 / 206
テキストC
1　京の四季 / 210
2　土の香り / 214
3　インディアの夜と薔薇 / 217

阅读策略专栏四

预习　预测 / 220

第十三課

テキストA　海辺の光景 / 222
テキストB　花の下 / 226
テキストC
1　雪間 / 229
2　子どもたちの夜 / 235
3　海の鳥・空の魚 / 239

第十四課

テキストA　城の崎にて / 244
テキストB　戦後その精神風景・死 / 249
テキストC
1　猫の話 / 252
2　科学信仰の罪と罰 / 257
3　死とは形が影になること / 261

第十五課

テキストA　敗戦後論 / 267
テキストB　手 / 271
テキストC
1　桐の花咲く頃 / 273
2　領土巡る熱狂 「安酒の酔いに似てる」/ 277
3　日本の夏・戦争の夏 / 281

阅读策略专栏五

通读 / 284

第一課

考えよう

ア　あなたは、本を読むのが好きか。書物が洪水のように氾濫している今、何を読むべきかと戸惑ったことがあるか。もしあったら、そのとき、どうしたのか。

イ　本の読み方には、精読、速読、多読などがある。濫読という言葉さえある。あなたは、普通どんな読み方を取っているか。濫読についてどう考えているか。

テキストA　読書について

小林　秀雄

＜読解ストラテジー　スキミング・要点まとめ＞
次の文章を10分以内に読んで、筆者の主張を代表する文にマークをつけなさい。そして、整理して文章の要旨をまとめなさい。隣同士の間で比較対照しなさい。

ぼくは、高等学校時代、妙な読書法を実行していた。学校の行き帰りに、電車の中で読む本、教室でひそかに読む本、家で読む本、というぐあいに区別して、いつも数種の本を平行して読み進んでいるようにあんばいしていた。まことにばかげた次第であったが、その当時の常軌をはずれた知識欲とか好奇心とかは、とうてい一つの本を読み終わってから他の本を開くというような悠長なことを許さなかったのである。

だが、今日のように、思想の方向も多岐にわたって乱れ、新刊書の数も種類も非常に増して、読書のしかたとか方法とかについてとまどっている多くの若い人たちを見るにつけ、ぼくは考えるのだが、自分ががむしゃらにやった方法などは、あんがいばかげた方法ではなかったか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

もしれぬ、と。もしかしたら、読書欲に憑かれた青年には、最上の読書法だったかもしれないとも思っている。

濫読の害ということがいわれるが、こんなに本の出る世の中で、濫読しないのは低能児であろう。濫読による浅薄な知識の堆積というものは、濫読したいという向こうみずな欲望に燃えているかぎり、人に害を与えるような力はない。濫読欲も失ってしまった人が、濫読の害など云々するのもおかしなことだ。それに、ぼくの経験によると、本が多すぎて困るとこぼす学生は、たいがい本を中途でやめる癖がある。濫読さえしていない。

努めて濫読さえすれば、濫読になんの害もない。むしろ濫読の一時期をもたなかった者には、後年、読書が本当に楽しみになるということも容易ではあるまいとさえ思われる。読書の最初の技術は、どれこれの別なくむさぼるように読むことで養われるほかはないからである。

ある作家の全集を読むのは非常にいいことだ。研究でもしようというのでなければ、そんなことは全くむだごどだと思われがちだが、決してそうではない。読書の楽しみの源泉にはいつも「文は人なり」ということばがあるのだが、このことばの深い意味を了解するのには、全集を読むのが、いちばん手っとり早いしかも確実な方法なのである。

一流の作家ならだれでもいい、好きな作家でよい。あんまり多作の人はやっかいだから、手ごろなのを一人選べばよい。その人の全集を、日記や書簡の類に至るまで、すみからすみまで読んでみるのだ。

そうすると、一流といわれる人物は、どんなにいろいろなことを試み、いろいろなことを考えていたかがわかる。彼の代表作などとよばれているものが、彼の考えていたどんなにたくさんの思想を犠牲にした結果生まれたものであるかが納得できる。単純に考えていたその作家の姿などは、この人にこんなことばがあったのか、こんな思想があったのかという驚きで、めちゃめちゃになってしまうであろう。その作家の性格とか個性とかいうものは、もはや表面のところに判然と見えるというようなものではなく、いよいよ奥のほうの深い小暗いところに手探りで捜さねばならぬもののように思われてくるだろう。

ぼくは、理屈を述べるのではなく、経験を話すのだが、そうして手探りをしているうちに、作者にめぐり会うのであって、だれかの紹介などによって相手を知るのではない。こうして、小暗いところで、顔は定かにわからぬが、手はしっかりと握ったというぐあいなわかり方をしてしまうと、その作家の傑作とか失敗作とかいうような区別も、べつだんたいした意味をもたなくなる、というより、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるというようになる。

これが、「文は人なり」ということばの真意だ。それは、文は目の前にあり、人は奥のほうにいる、という意味だ。

「文は人なり」ぐらいのことはだれにでもわかっているというが、実は犬は文を作らぬ、ということがわかっているにすぎない人が多い。

書物が書物には見えず、それを書いた人間に見えてくるのには、相当な時間と努力を必要とする。人間から出てきて文学となったものを、再びもとの人間に返すこと、読書の技術というものも、そこ以外にはない。もともと出てくる時に、明らかな筋道を踏んできたわけではないのだから、もとに返す正確な方法があるわけはない。

要するに読者は暗中模索する。創った人を求めようとして、創った人のまねをするのだ。

なるほど、作者という人間を知ろうとして、その作家に関する伝記その他の研究を読んだり、その時代の歴史を調べたり、というようないろいろな方法があるが、それは碁将棋でいえば定石のようなものだ。定石というものは、勝負の正確を期するために案出されたものには相違ないが、実際には勝負の不正確さ曖昧さを、いよいよ鋭い魅力あるものにする作用があるだけだ。人間は、厳正な知力を傾けて、曖昧さのうちに遊ぶようにできている。

読書百遍とか読書三到とかいう読書に関する漠然たる教訓には、容易ならぬ意味がある。おそらくあとにも先にもなかった読書の達人、サント・ブウヴ[1]も、漠然たる言い方は非常にきらいであったが、読書については、同じように曖昧な教訓しか残さなかった。

「人間をよく理解する方法は、たった一つしかない。それは、彼らを急いで判断せず、彼らの傍らで暮らし、彼らがみずから思うところを言うに任せ、日に日に伸びてゆくに任せ、ついにぼくらのうちに、彼らが自画像を描き出すまで待つことだ。

故人になった著者でも同様だ。読め、ゆっくりと読め、成り行きに任せたまえ。ついに彼らは、彼ら自身のことばで、彼ら自身の姿を、はっきり描き出すに至るだろう。」

なぜ、こういう教訓が容易ならぬ意味をもつか。こういうふうに、まにあわせの知識の助けを借りずに、他人をじかに知ることこそ、実は、本当に自分を知ることにほかならぬからである。人間は自分を知るのに、他人という鏡をもっているだけだ。自己反省とか自己分析とかいう浪漫派文学の産んだ精神傾向は、感傷と虚栄とのまどわしに満ちた、架空な未熟な業にすぎない。

杉村楚人冠氏[2]の感想だったと記憶するが、印刷の速力も、書物の普及の速力も驚くほど速くなり、書物の量はいよいよ増加するいっぽう、人間の本を読む速力が、依然として昔のままでいることは、まことに滑稽の感を起こさせるものだ、という意味の文章を読んだ。ぼくは読書の真髄というものは、この滑稽のうちにあると思っている。

文字の数がどんなに増えようが、ぼくらは文字をいちいちたどり、判断し、納得し、批評さえしながら、書物の語るところにしたがって、自力で心の一世界を再現する。このような精神作業の速力は、印刷の速力などとなんの関係もない。読書の技術が高級になるにつれて、書物は、読者を、そういうはっきり目の覚めた世界に連れてゆく。逆にいい書物は、いつもそういう技術を、読者に目覚めさせるもので、読者は、途中でたびたび立ち止まり、自分がぼんやりしていないかどうか確かめねばならぬ。いや、もっと頭のはっきりした時に、もういっぺん読めと求められるだろう。人々は、読書の楽しみとは、そんな堅苦しいものかといぶかるかもしれない。だが、その種の書物だけを、人間の知恵は、古典として保存したのはどういうわけか。はっきりと目覚めて物事を考えるのが、人間の最上の娯楽だからである。

今日のような書物の氾濫の中にいて、何を読むべきかと思案ばかりしていても、流行に書名を教えられるのが関の山なら、これはと思う書物に執着して、読み方のくふうをするほうが賢明だろう。

【注】

① サント・ブウヴ:圣伯夫(Charles Augustin Sainte-Beuve)。法国诗人、文艺评论家。

② 杉村楚人冠:日本报刊记者、随笔作家。日本报纸研究的先驱。

単語

あんばい〔塩梅・按配・按排〕	【名・サ変】	程よく配置したり処置したりすること。
定石〔じょうせき〕	【名】	囲碁で、攻守ともに最善の方法とされる、きまった形の打ち方。
読書三到〔どくしょさんとう〕		(朱熹「訓学斎規」)読書の法は心到・眼到・口到にあるということ。
いぶかる〔訝る〕	【動】	変だと思う。
関の山〔せきのやま〕	【連語】	なしうる限度。精一杯。

作者の紹介

小林　秀雄(こばやし　ひでお)

1902年～1983年。文芸評論家。芸術の創造を内面からとらえる近代的な批評の方法を確立し、個性的な文体のエッセイを発表している。『様々なる意匠』『ドストエフスキイの生活』『無常といふ事』『近代絵画』などの評論のほか、多くの訳書がある。本文は『小林秀雄全集第四巻』による。

練習問題

問1　7行目に「ぼくは考えるのだが、自分ががむしゃらにやった方法などは、あんがいばかげた方法ではなかったかもしれぬ、と。」とあるが、「がむしゃらにやった方法」と同じ意味を表す文中の表現として、次のどれとどれが適切か。

① 濫読　② 読書百遍　③ 暗中模索　④ 自己反省　⑤ 読書三到　⑥ 一つの本を読み終わってから他の本を開く　⑦ どれこれの別なくむさぼるように読む　⑧ 作家の全集を読む

問2　49行目に「それは碁将棋でいえば定石のようなものだ。」とあるが、「それ」は、何をさすか。正しいものを次の中から一つ選びなさい。

① 作家に関する伝記その他の研究を読むこと。
② その作品を書いた時代の歴史を調べること。
③ 読者が暗中模索すること。
④ 作者のまねをして作品を書くこと。

問3　なぜ、筆者は「読書百遍とか読書三到とかいう読書に関する漠然たる教訓には、容易ならぬ意味がある。」(53行目)と言っているか。

問4　筆者の主張から見れば、この文章はいくつの部分に大きく分けられるか。それぞれどこからどこまでなのか。各部分における筆者の主張はそれぞれ何か。簡単にまとめなさい。

問5　ディスカッション:文章中に触れているいくつかの対立する見方をまとめなさい。それに対し、あなたはどう思っているか。クラスメートとディスカッションしながら、それぞれの視点の違いを考えなさい。

テキストB「本」人それぞれの出会い

藤原　智美

＜読解ストラテジー　スキミング・要点まとめ＞
次の文章を3分以内にスキミングして、作者がどんな読書歴を持っているか、結局、読書についてどう思っているかを簡単にまとめなさい。

ぼくが東京で暮らすようになったのは、いまから十九年まえのことだ。博多から上京して、井の頭線池ノ上駅近くの古びた六畳一間のアパートで新しい生活がスタートした。

陽当たりよい角部屋で、はじめてむかえた朝、窓からやわらかな光が、布団以外なんにもない部屋にさしこんでいた。ぼくは真新しい畳いっぱいにキラキラとひろがる朝日を、布団のなかから、いつまでもただ眺めていた。

まずベッドと机、冷蔵庫、ラジカセを買った。それから食器類もひととおりそろえた。けっきょく自炊などほとんどしなかったのだが——。

高校時代まで本はほとんど読まなかった。だから本棚を買うという発想がなかったのだろう。小さな白い合板の本棚を買ったのは、それから一年ほどしてからだった。いかにも安っぽいそいつは、本棚というよりむしろラジカセやコップやカセットテープをならべたほうがピッタリとくるもので、風格というものがまったくなかった。近所のスーパーマーケットの一角で催された家具の特売で買ったのだから無理もない。

そこではじめてならべた本は、教科書や辞書をふくめて三十冊もなかった。もちろん図書館にかよったわけでもない。ことほどさように、ぼくの読書生活はいたって貧困だった。

演劇科ではなかったが、大学ではもっぱら芝居ばかりやっていた。稽古にいくために大学にかよったようなぐあいで、とてもほめられたものではなかったが、それなりに充実していた。少ないながらも、読書は晦渋な演劇論をテーマにしたものが多かった。しかし、どれもこれもつまらないものばかりで、およそ感動というものがなく途中でなげだした。それでもこりもせずに新しいものがでると買ってきた。きっと、本をならべておくことで、どこか安心感があったのではないかとおもう。仲間と議論したりするとき、ろくに読んでもいない本を話題にして煙にまいたり、いま考えるとじつに姑息だった。

あるときテレビをもらった。十四インチの白黒テレビだ。これがいけなかった。もうそれからは部屋に帰ると寝るまでテレビをつけっぱなしという生活になってしまった。それもただつけているというのではなくて、真正面から見つづけるのだから、始末にわるい。部屋に帰るとテレビを見る以外はなにもしなくなってしまった。

見すぎたからだろう。夜の一時、二時ごろになると脳みその分量が倍になったように重く、布団にはいるときはきまって無為に時間をすごした後悔でいっぱいになった。

朝、「もう絶対見ない」とテレビの電源コードをはさみでカットしたりもした。しかし夜になるとまた絶縁テープでそれをつないでまたテレビの前にすわりこんだ。まるで麻薬のようなものだった。

あるとき、友人から一冊の文庫本をもらった。アメリカの有名な小説で、夜、学校のそばの喫茶店でなんとなく読みはじめた。いつのまにか夢中になって、電車のなかでも読み、それから部屋にもどっても、テレビもつけずに読みつづけた。終わったのは明け方近くだった。なんとも形容しがたい感動があった。自分の知らない世界を開示されたような感覚で、一人でいて一人でないような不思議な気がした。それからぼくは、その小説の主人公のラストシーンとおなじように「深い、夢もない眠りにはいっていった」のだった。

以来、テレビ中毒から脱し本を読むことを覚えた。あの一冊がなんであったか、ここでは書かないでおくほうがいいとおもう。

そういう一冊というのは、人それぞれが違うものであって、また人それぞれが自分で出会うべきものだ。もしも、そういう出会いがなかったとしたら、やっぱりその人生はほんの少し不幸せだし、ほんの少し不自由で、ほんの少し味気ないものになるとおもう。

ぼくらの学生時代「このごろ学生は本を読まない」と非難された。いまはもっと読まなくなっている。このままいくと、みんなが本を読まなくなり、聴覚や映像のメディアばかりの情報で満足するようになるとおもう。そうなると、どんな世の中になるだろうか。ぼくには想像がつかない。

本を読むこと。それを過大評価するつもりはない。読書などせずにも、りっぱに世界観を確立している人などどこにでもいる。しかし、いつかどこかで「生きにくさ」のようなものを知り、あるいは不安定な自己を発見したとき、読書が助けになることだってある。自由に考えいっぱい行動して、つまずいたら本に逃げこんでみるという手だってあるのだ。

ともかく心配はいりません。あなたがたが若く、そして世界を切り開く力があり、なおかつ真摯に生きようとするなら——。

単語

ことほどさように〔事程左様に〕	【副詞】	以上述べてきたそのように。
こりもせず〔懲りもせず〕	【連語】	ひどい目に会って二度とすまいと思わずに。反省もしないで。
煙にまく〔けむにまく〕	【連語】	相手がよく知らないようなことを言って、相手を惑わせる。

姑息〔こそく〕	【名・形動】	一時的にその場が過ぎればいいとする様子。その場しのぎ。
始末にわるい〔しまつに悪い〕	【連語】	扱うのに困る。手に余る。

作者の紹介

藤原　智美(ふじわら　ともみ)

男性、1955年生まれ。小説家、エッセイスト。1990年、フリーランスのライターの傍ら『王を撃て』により小説家デビュー。1992年『運転士』により第107回(1992年上半期)芥川賞受賞。最近の作品には、『暴走老人!』『検索バカ』『骨の記憶』などがある。本文は、エッセイ「『本』人それぞれの出会い」の全文。

練習問題

問1　38行目に「自分の知らない世界を開示されたような感覚で、一人でいて一人でないような不思議な気がした。」とあるが、「一人でいて一人でない」という筆者の思いは、何だろうか。わかりやすく説明しなさい。

問2　42行目に「あの一冊がなんであったか、ここでは書かないでおくほうがいいとおもう。」とあるが、どうして筆者は「書かないでおくほうがいいと思う」か。

問3　50行目に「そうなると、どんな世の中になるだろうか。ぼくには想像がつかない。」とあるが、筆者の考えの筋道をたどっていくと、「どんな世の中になる」だろうか。

問4　文章の最後に「ともかく心配はいりません。」とあるが、どんなことを心配しなくていいと言っているか。

問5　ディスカッション:あなたには、「つまずいたら本に逃げこんでみ」たことがあるか。どうして、そんなときに読書が助けになってくれるか。クラスメートとディスカッションしなさい。

テキストC

1　読書の態度

伊藤　整

勉強とか義務として、巨大な本の堆積を消化することは大して意味がないと言っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com